



Title	第8回 ウィリアム・モリス研究会
Author(s)	高安, 啓介
Citation	デザイン理論. 2024, 84, p. 94-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第 8 回 ウィリアム・モリス研究会

日時：2023 年 12 月 16 日（土）13：00-17：00

場所：大阪大学中之島芸術センター

主催：意匠学会

担当：大阪大学美学研究室

本分科会は、ウィリアム・モリスに関連する研究をめぐって学術的な議論をかわすことを目的として、年一回、研究会をひらいています。世界のモリス受容や、モリスに関連のある内容についての発表もできます。意匠学会の分科会ですが、会員以外の参加者にもひらかれています。過去 2 年の研究会はオンライン開催でしたので、今回はあえて少人数の対面でおこなうこととし、14 名が参加しました。5 つの研究発表があり、懇親会にも多くのかたが参加して、ねらいどおり参加者どうしの交流を深める機会となりました。

高安啓介（大阪大学）

プログラム

司会 吉村典子 | 宮城学院女子大学

13：00-13：10 はじめに 参加者の自己紹介

13：10-13：50 ウィリアム・モリスとダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ
藤田治彦 | 大阪大学名誉教授

13：50-14：30 ウィリアム・モリスとラファエル前派
古建築物保護協会の設立をめぐって
江澤美月 | 一橋大学

14：30-15：10 トマス・ハーディと古建築物保護協会
川端康雄 | 日本女子大学名誉教授

15：20-16：00 “Another Unfortunate”
19 世紀のファストファッション事情と搾取反対運動
横山千晶 | 慶應義塾大学

16：00-16：40 社会活動そのものの美質を問う
モリスを出発点として
高安啓介 | 大阪大学

【発表 1】

ウィリアム・モリスとダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ

藤田治彦 | 大阪大学名誉教授

ウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）はオックスフォード大学卒業後、親友のエドワード・バーン＝ジョーンズ（Edward Coley Burne-Jones, 1833-1898）と共に、画家・詩人のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ（Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882）に学ぶようになった。モリスとバーン＝ジョーンズは、以前ロセッティが住んでいたロンドン中心のレッド・ライオン・スクエア 17 番地に、1856 年から 1859 年まで住み、ロセッティに絵画を学んだ。1857 年には、ロセッティが引き受けたオックスフォード・ユニオン（学生会館）討論室に壁画を描く仕事を手伝い、モリスやバーン＝ジョーンズ等も壁紙を描いた。画家を目指すバーン＝ジョーンズは、ロセッティ同様、大きな人物を含む適切な壁画を描いたが、モリスが描いた人物は小さめで、人物より花などが多く、暗い絵で、光窓の周囲にあるモリスの壁画は見えにくい、天井装飾もほぼ独自で多数制作した。モリスは、1859 年にジェイン・バーデン（Jane Morris, 旧姓バーデン Jane Burden, 1839-1914）と結婚し、1860 年にロンドン東に、同じ親友の建築家フィリップ・ウェッブ（Philip Speakman Webb, 1831-1915）と共に制作のレッド・ハウスに、モリス夫妻が入居した。レッド・ハウス内にはモリス自体と多くの親友や人物が、室内に様々な制作をした。1860 年に、ロセッティが 2 階の家具の一部に設置予定の《ダンテの愛》をモリス夫妻に寄贈したが、そこに描かれている右下の女性はジェインに似ているが、左上の絵の男性はモリスよりも、描き寄贈のロセッティ自体に似ており、モリスは《ダンテの愛》をロセッティに返還した。1871 年にロセッティの健康を気遣って共同賃借したのが、テムズ川上流のケルムスコット・マナーであった。モリスの妻ジェインは二人の女性子供と共に、ケルムスコット・マナーで、ロセッティと共に暮らした。モリスはモリス・マーシャル・フォークナー商会の仕事が重要で、遠いケルムスコット・マナーにはあまり行かず、ロセッティとジェインらが暮らす夏の 1871 年と 1873 年に、遠い北部のアイスランドに行っていた。1874 年にはロセッティがケルムスコット・マナーの共同借地権放棄し、モリス家族のみが使用のテムズ川上流の美しい家になり、1878 年にロンドン西部のハマスミスに移転した家も「ケルムスコット・ハウス」の同様の名称に設置した。モリスは壁紙や染色やステンドグラス等、モリス・マーシャル・フォークナー商会で共同制作し、自宅でも彩飾手稿本も個人で制作していたが、この 1874 年頃から、さらに重視し、興味深い作品が増えていった。1875 年には、ロセッティその他の人物を商会から解散し、ウィリアム・モリス独自の、モリス商会に変わって行った。

【発表 2】

ウィリアム・モリスとラファエル前派

—— 古建築物保護協会の設立をめぐる

江澤美月 | 一橋大学

モリスが反修復の立場から、1877 年に古建築物保護協会を設立した背景について、藤田治彦氏は「ウィリアム・モリスと反修復運動」で、歴史建造物の保存と修復をめぐる論争があり、その価値観対立の源泉は、18 世紀のゴシック・リヴァイヴァルまで遡ると指摘している。そのことを踏まえ本発表では、特に 19 世紀イギリスの建築家として、ジョージ・ギルバート・スコットとジョージ・エドモンド・ストリートに注目したい。

スコットは、モリスが 1877 年『アシニアム』に公開抗議文を送る契機になったテュクスベリー大聖堂の修復を計画したヴィクトリア朝時代を代表する修復論者であり、ピーター・フォークナーはモリスが『アシニアム』を選んだ理由として、ジョージ・フレデリック・スティーヴンスが同誌上でスコットの修復を批判していたことを挙げている。スティーヴンスは、ラファエル前派の創設メンバーの一人であり、モリスは 1877 年に古建築物保護協会を創設するにあたり、別の創設メンバー、ダンテ・ガブリエル・ロセッティにも支援を頼んでいる。

一方、モリスがその前年の 1876 年に衝撃を受けたバーフォード聖堂の修復は、ストリートによるものであることがフィオナ・マッカーシーにより指摘されているが、ストリートは、かつてスコットの助手であり、モリスは、古建築物保護協会とともに設立したフィリップ・ウェブ同様、ストリアートの建築事務所に所属したことがあった。

さらに、モリスの書簡を調査した結果、彼は、1877 年 7 月ラファエル前派の擁護者として知られるジョン・ラスキンに、古建築物保護協会のリーフレットに『建築の七灯』から反修復に関する部分の転載許可を乞い、1880 年の 5 月には、彼に協会の総会の議長を務めてくれるよう依頼していることがわかった。

このように本発表では、モリスがラファエル前派そして彼等を支持したラスキンと共に古建築物保護協会の設立に関連して活動したことを考察する。

【発表 3】

トマス・ハーディと古建築物保護協会

川端康雄 | 日本女子大学名誉教授

イギリスの作家・詩人トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840–1928) は石工の棟梁を父として生まれ、16 歳で地元ドーチェスターの建築家ジョン・ヒックスの事務所で徒弟修業を始め、20 歳代にはアーサー・ブロムフィールドら数人の建築家のもとで仕事をした。並行して詩と小説を書いていたが、作家に専念する決断をしたのは 30 歳を過ぎてからのことで、建築家を本業とする道もありえた。彼の小説

には建築への深い造詣が認められる。また 40 歳代半ばでドーチェスター近郊に建てた自宅「マックス・ゲイト」はハーディ自身が設計したものだった。

建築事務所の助手として手がけた仕事の重要な部分が古建築、特に教会建築の「修復」(restoration)だった。時は 19 世紀中葉、ゴシック・リヴァイヴァルの建築家たちによる「修復」工事が流行の真っ盛りで、青年ハーディは、建築助手として、モリスが批判したような破壊行為に等しい「修復」に手を染めることが必然的にあった。その反省がひとつの動機であったかと思われるが、小説家としてすでに成功を収めていた 1881 年に古建築物保護協会 (SPAB) に入会している。モリスが同協会を立ち上げてから 4 年後のことだった。

SPAB の会員としては、故郷ドーセット州の建築物を中心に、彼にとって認めがたいと思われる「修復」計画が持ち上がった際に、SPAB の事務局や地元関係者と連絡を取り合い、保護活動に協力した。1906 年には SPAB の求めに応じて「教会修復の思い出」を執筆、年次大会でそれが代読された。このエッセイにはハーディの「修復」についての見解が面白い逸話をまじえて語られている。そのなかには、古建築物の保護とは「記憶、歴史、フェローシップ、兄弟愛の保存」であるという印象的な文言が含まれている。

本発表では、ハーディの古建築物保護協会への関与について、いくつかの事例を紹介するとともに、「教会修復の思い出」に見られる「修復」批判（と反省）を、モリスの古建築物保護の見解と比較しつつ考察してみたい。

【発表 4】

“Another Unfortunate”

19 世紀のファストファッション事情と搾取反対運動

横山千晶 | 慶應義塾大学

19 世紀に生地専門店や服飾専門店がやがてデパートとなっていった背景には、既製服の大量生産があった。しかし、衣服の工業生産が可能となるのは、19 世紀も終わりになってからのことで、女性用のドレス、制服、シャツ、帽子、靴の製作は、そのほとんどを女性や年端の行かない子供たちの手仕事で支えていた。この低賃金の「苦汁労働 (sweated labour)」の実態は 1843 年 12 月に『パンチ』誌に載った Thomas Hood の詩、“Song of the Shirt”によって、人々の知るところとなり、詩にインスピレーションを得た複数の絵画は、自らの作り出すものに搾取される若い女性たちのイメージを人心に刻印することとなった。

このような既製服を売る店は一般に slop-shop と呼ばれたが、苦汁労働の末に身を持ち崩してしまう「堕ちた女 (fallen women)」を生む「社会悪 (social evil)」として批判されることになる。19 世紀に入り、搾取の末に身を持ち崩す女性たちは、「不運な女 (unfortunate)」として語られるようになるが、この言葉は、墮落の原因は女性たちにあるのではなく、低賃金と労働環境こそが問題であるとの視点を表していた。こうして女性たちの救済組織として 1857 年に結成されたのが、The Committee of Reformatory and Refuge Union である。その中心的な役割を担っていたのが、John La Touche。かの

John Ruskin が恋に落ちたローズの父であった。ジョン・ラ・トゥーシュは、女性たちの声を聞き取り、彼女たちに成り代わって新聞に投稿するなど、この「社会悪」を広く世間に広めようと努力した。また、「廉価既製服商反対同盟 (Anti-Slop-Shop League)」を結成し、質の良い既製服を生み出す新たな slop-shop を運営することで、安価で高品質の商品を保証する労働の在り方を模索した。

本発表では、ヴィクトリア朝の衣料製作の実態とその改善に向けての動きを見ていくことで、21 世紀でも起こっている衣服製造の搾取の根源を探ってみたい。

【発表 5】

社会活動そのものの美質を問う

—— モリスを出発点として

高安啓介 | 大阪大学

何かの目的のための活動それ自体がいつのまにか目的となることはよくあるが、考えてみたいのは、社会活動における場合である。すなわち、集団で何かを生み出す活動それ自体が、生み出されるものと同様かそれ以上の価値をもちうる場合であり、問題の解決に向けた取り組みそのものが魅力をもちうる場合であり、人々の良い人生を実現するための活動それ自体がすでに、人々の良い人生となるような場合である。美とは、物事それ自体の良さであり、何らかの快をともなう良さならば、社会活動のうちにも、美とは言わないまでも、何らかの美質が見出されうだろう。それはたとえば、喜ばしきや、親しみや安らぎ、高揚感などである。

本発表は、こうした関心のもと、ウィリアム・モリスの労働思想について検討をおこなった。モリスは、装飾美術家として知られるが、モリスは繰り返し、芸術は「人々の労働の喜びの表現である」と主張したように、装飾品の美しさのみならず、ものが生み出される過程それ自体の「喜ばしき」を問題にした。けれども、モリスはこう言うときに、共同作業や、人と人との交わりの魅力よりも、一人一人の自由な仕事や、一人一人の独自の仕事のほうに力点を置きがちだった。モリスの文章をとおしては、意外なことに、社会活動の美学といえる思想はあまりみられないのである。

モリスの現代性について考えるために比較したいのは、山崎亮のコミュニティデザインである。コミュニティデザインは、仕組みを考えたり、出来事を考えたり、一定の条件を整え、人々の協力関係をうながして、人々が自ら問題の解決にあたれるよう支援をおこなうデザインである。そしてそのために、人々の社会活動そのものに魅力をあたえることが大事な仕事となる。山崎亮みずから、ラスキンおよびモリスからの影響をみとめているが、先達よりもむしろ共同作業の楽しさを重視しているようにも見える。仕事の内容の違いもあるだろう。社会活動の美学は、コミュニティデザインのうちに見て取れることを確認した。

発表募集

研究会は、毎年 12 月頃におこなわれてきました。研究会では、ウィリアム・モリスに関連する研究の成果を発表できます。意匠学会員でなくても発表できますが、800 字程度の発表要旨にもとづいて、学会の担当委員による審査によって発表の可否が決まります。遅くとも 10 月には、意匠学会のメールおよびホームページにて発表募集をおこないます。

高安啓介（大阪大学）